

立春を過ぎたからでしょうか、陽に照らされた雪の塊がどんどん小さくなっていきます。春はすぐそこに…子どもたちが歌い奏でる音楽からもそんな感じがわき起こります。

さて、昨日、田中和幸副校長先生による講話がありましたので、以下ご紹介いたします。



平成29年2月7日 「息」

全校のみなさん、おはようございます。

6年生の皆さんのステージづくりのおかげで、私たちは、思う存分、このステージを使い、なじみ、金曜日の音楽会を迎えられます。

数々の附属長野小学校を、そして、児童会をはじめとする数多くの行事を先導し続けてきてくれた6年生。ありがとう。

今日は、このお話をしたいと思います。

息

1年生のみなさんは、先生から毎日のように出される学年通信や学級通信をもらったら、かばんに入れてそのままおうちの人に渡すのかな？ それとも、自分でわかるところは読んだりもするのかな？

2月1日に書かれた「1学年だより」には、こんなことが書かれていました。

先週のことでした。Tさんが、キャベツの袋をもってきて、ブルーシートに、手際よく、ちぎってきてあったキャベツを並べながら話します。

「お家で干してきたの。お家で干すときは新聞紙とか袋の上で干しているんだよ」と。



私は、この「1学年だより」を読みながら、「そうかあ、Tさんは、家に居るときも家に居ない『きき』が、ずっとそばに居るんだろうな」「家には居ない『きき』だけれど、キャベツの用意しながら、『きき』と話をしているんだな」と想像していました。

こちらは2月2日 2年生の学年だよりです。そこにはSさんの日記が載っていました。

私は、今日掃除が終わっても掃除をしていたKさんを見て、どうしてそんなに真剣に掃除にむきあっているのか不思議でした。でも、誰かが そうやって一生懸命何かをやっているから気持ちよく生活できるんだなと。Kさんがやっていることで、自分が当たり前だと思っていたことが、深く感じました。

Sさんの、自分がやっていることが深く感じたというのは、もしかしたら、当たり前のことは当たり前ではないのかもしれないと思ったのでした。

毎日の暮らしは、誰かとつながっています

それは動物であったり、友達であったり、何か共にやりきった行事であったり… そして、つながるとは、相手の声を聴くことなくして存在しません。



音楽も「つながる」中で生まれる 音楽も、こうした教室での暮らし・いとなみの あられ

教室でのいとなみ（暮らし）が
あられる音楽でありたい

だと言えます。

こちらは2月3日、音楽会のステージ練習を振り返った4年生の学年通信です。ここにはAさんのステージ練習の振り返りが書かれていました。

合唱は昨日と同じくらい大きな声で歌えた。昨日も今日も息を全部使って歌ったから気持ちよかった。合奏はもうちょっとみんなの音を聞いてやりたい。



6年ほど前、私が5年生を担当していた時のことでした。

米作りをはじめた子どもたちは、田んぼに生えてくる雑草を鯉に食べてもらおうと約200匹の鯉を田んぼに放しました。しかし、田んぼに貯まった水は暑さからどんどん水温が上がり、鯉は次々に死んでいきました。「これではいけない。鯉が全滅してしまう…」そう思った子どもたちは、田んぼに入り、救い出そうとしたのですが、逃げられてしまうばかりで、十数匹しか捕まえられませんでした。

このころ、学級では、「2億年ずつ23回」という歌を歌っていました。

この映像には、鯉に思いを寄せる子が、4年生の時に比べて、語り合うことは決してうまくやらなくてもいい、そこには友達がいるから… だから、私が私でいられる、といったことを語るシーンがあります。（映像は省略します。）



1月31日の朝のことでした。

朝の放送時に「いのちの歌」が流れてきました。

私は、なんだかとても懐かしく、そして心地よい気持ちに包まれていました。今日がなんだかいい1日になりそうな気持ちになってきたのです。

そんな時でした。

廊下を歩く低学年の子たちが、この歌を口ずさんでいるのです。そして、そのあと、大藪先生が「うーうーうーん」なんて口ずさみながら校長室の前を通り過ぎていきました。



みんなで歌った歌。一緒にかみしめながら歌った歌。いつしか、それが自分の中に入って自分の歌になった。印象に残るシーンと私の中の何かが重なりあって自分の歌になって、口から自然とあふれ出した。

自分が歌いたいから歌う

一人一人が自分の歌いたいもの 歌がある
「誰かに合わせなさい」じゃなくて、まず
一人になって歌う
歌わされる型にはまるのではなく

あなたはなぜ歌うのですか
あなたはどのようにして聴くのですか



以前、プロの合唱をしている人がこんなことを言っていました。

「指揮者と私が向き合ったとき、私が自分の世界に入り込めた。私になれた」と。

そうした 一人ひとりがいてこそ
みんながいる
まちまちに息をしていたら音を生かせない
一人ひとりの息が
音が
つながる
つながっていく音楽

息とは 自らの心と書きます

音楽会という場は 一人ひとりが自分のおもいを吸い
はき出すとともに
相手のおもいを感じ
つなげる場でありたいと思うのです

息とは
自らの心と
書く

終わります。